

東日本大震災から10年。農地が津波被害を受けた宮城県名取市の耕谷アグリサービスでは、米づくりを再開し農業は軌道に乗る。そのなかで、震災直後に「農業の第一歩」として始めた綿の栽培を今も続ける思いとは。

東日本大震災の津波被害 綿の栽培を通して語り継ぐ

東日本大震災の当時、宮城県の仙台空港の近くで農業法人を経営していた佐藤富志雄さんに、災害の時の状況をうかがった。震災を体験した方に直接、話を聞くというのは、すぐ考えさせられるものがあった。

2011年3月11日、建物や電気が水道が止まり、ラジオやテレビで情報を入手することもできなかったという。そこには想像を絶する恐怖があったのではない。唯一ついたカーテ



レビを見て、初めて自分の身に津波が迫っていることを知ったという。やがて、海の方から波がゆっくりと押し寄せてきて、がれきや自動販売機などが流されてきた。波の中には、犠牲になった人もいた。「まさに想定外の災害だった」と話していた。

津波が起きたことによ

り、田に海水(塩水)が入り、それまでやってきた米づくりができないう状況になった。そんな時、綿(綿花)ならつくれるかもしれないと聞き、ダメ元でつくることにし、農業の再スタートを切った。その決意には佐藤さんの強い思いが込められていると感じた。育てた綿は、ふわっとしてあたたかかったそうだ。

それでも人の心の悲しみが消えることはない。だからこそコミュニケーションを取ることが大事だと話していた。実際、社員の家族3人も亡くなったそうだ。東日本大震災はたくさんの命を奪った。そして、その一人ひとりに家族がいて、たくさんの人の心に傷を残したということであらためて感じた。



有限会社 耕谷アグリサービス 佐藤富志雄さん

綿は、あまり収入になら

なかつたそうだ。だけど、復旧に向けての第一歩として出会った綿を後世につないでいきたいと、強く言っていた。綿でつくられる布はすぐ柔らかくて優しいという。それは、佐藤さんの長年の苦労と思いが映し出されているのだと思った。



古川 柚姫 記者

震災直後の耕谷アグリサービスの耕作地



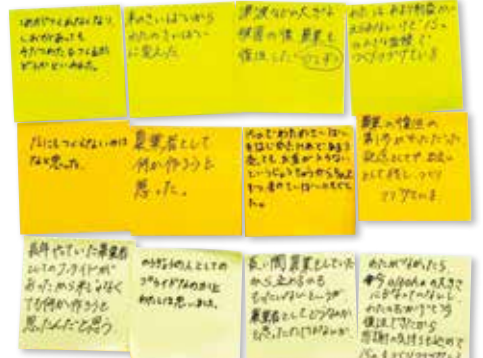
震災直後の耕谷アグリサービスの本社付近



現在の耕谷アグリサービスの耕作地



リモート取材する子ども記者



ワークショップを行い情報の整理を行った